
眠れる世界

あからーく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

眠れる世界

【Nコード】

N1584Y

【作者名】

あからーく

【あらすじ】

目覚めるとそこは見知らぬ世界。

三十路を越えた主人公の行先は不明です。

完全に見切り発車ですが完結させるように頑張ります。

処女作な事もあり稚拙で乱文ではありますが生暖かい目で見て頂けると幸いです。

ぶろろーぐ的なこと

目が覚めるとベッドの上で銀髪の女性を抱き締めていた。

極至近距離で視線が絡み合う。

彼女はうつすらと頬を染めつつもなんとも冷たい表情を自分に向けている。

落ち着け、落ち着くんた俺。今すべきは香ってくる良い匂いを満喫する事じゃない状況確認が最優先事項だ。

まず身なりは若干乱れてはいるが仕事疲れと深酒からそのままベッドに倒れこんだ時同様Yシャツスーツ姿のようだ。

次に銀髪の女性だ。密着している事もありおそらくネグリジェのような薄い肌着を着ているのは解るが…

やはりそういう事なんだろうか。

とりあえず昨晚の行動を思い返してみる。

俺こと一瀬優【いちのせゆう】はミニコミ系の小さな新聞社に勤める31歳。

家族は大学時代に事故で両親と死別し親戚関係も殆ど無かった事からそのまま実家で独り暮らしを続けている。

彼女も3年前に別れて以来女っ気も無し。

友人や職場での評価は上々。見た目も我ながら悪くないしトークスキルと社交性は自分の武器であり女性と年輩受けも非常に良い。

只実際の所はコミュ障だと言っている。

友達なら大量にいるがその実メールや電話もろくにしないし、ある種の壁を常に挟んで付き合っている。

無論飲みや遊びに誘われれば参加もするし盛り上げる。

けど決して懐までは近づけさせないし、その事実を気付かせない。気の合う友人がいなかったわけでもなく、それならば何故？と言われるても自分でも理由が分からない。

で話しは戻るが昨晚の行動だ。

夕方に遠方で取材が入りそのインタビュー記事を出先でまとめてノートPCで本社に送信し、そのまま直帰で帰宅したはず。

明日は休日だったので帰り道にコンビニでビールをまとめ買いし、たらふく飲んでベッドにダイブが一連の流れだと思う。

ならば何故この美味しい状況なんだ。

無意識にイケナイお店に宅配サービスを電話したのだろうか。

それとも夢か妄想なのか…

考えてもらちが明かないので目の前の女性を更にぎゅっと抱き締める事にした。

深い意味はない。

頬を僅かに染めた知的そうな顔立ちが好みだったし折角なので…的な意味合いだと思って頂きたい。

その女性は頬を更に染めつつ大きく目を見開いて完全に硬直しているようだ。

とりあえず安心させるように綺麗な銀髪を撫でてみる。

すると真っ赤に染まった顔を俯かせ両手で俺の胸を押し返そうとしてくる。

だけど俺は逃がすまいと片手は絶対離さない。

うん。ほんとになんだこの状況。

すると耳が妙に尖っている事に気付いた。

これが流行りのプチ整形ってやつかと思いき優しく触れてみることにした。

すげー自然なんだなあ…医学の進歩に驚きを覚えつつもムニムニしていると腕の中の女性が目に見えてビクビクツツとしている。

そうやって撫でつつもどうしたもんかなあと思っていると初めて第三者の存在に気付いた。

「~~~~~Й!~~~~~Йс!」

ベッドの影に俺の手中から銀髪さんをひっぺがそうとしているやはり銀髪の小柄な女の子がいた。

その半泣きの女の子と視線があつたので、不安にさせまいとして最上の笑顔を向けてみた。

「У н р щ ё л х ц ё ! У д х ц ч ! !」

非常にお怒りなようで俺の頭の方に回り込んでポカポカと擬音通りに叩いてくる。

当然ながら全く痛くないがそれよりも今の台詞だ。

今まで一度も聞いた覚えのない外国語とおぼしきもの。

そして段々と冷静になり俺は初めて周りの景色に違和感を覚えた。

『夢や妄想にしてはリアル過ぎるなコレ』

俺の部屋にあつた家具や鞆は確かにここにある。

だけど壁が木だ。出入口らしき空間からは朝陽が射し込んでくるがそもそもドアが無い。

外からは先の外国語らしき声も聞こえてきた。

「参ったね…」

呟いていると俺に囚われた銀髪さんが顔をあげて自分を見ている事に気付いた。

ファンタジーへようこそ

結論から言うと俺は後ろ手に縛られ、線の細いお兄さんやらお姉さん達に部屋の中央で囲まれている。
俗に言う詰んだ状況だろう。

少し時間は巻き戻る。

ベッドで銀髪さんが俺を見上げ口を開きかけた時に新たに訪問者があつたのだ。

そこにはやはり銀のティアラっぽい物を身に付けた銀髪の長身の女性がこちらを見て棒立ちしていた。

同族の女性を抱き締め更には小柄な子に叩かれている俺。

どうみても不審人物です。本当にありがとうございました。

俺の知識でいうレイピアのような細身の剣を抜き放ち駆け寄ってくる様は絵に書いたように綺麗だった。

見惚れていたのは一瞬。

あっさりと組しかれ俺の手中にあつた銀髪さんは解放され今度は俺がティアラさんの膝したに囚われる番でした。

見ようによつてはこれも先の状態同様美味しい場面なのだろう。

だけど殺気と困惑を併せ持った女性に組しかれて美味しいと思える域に俺は達していないのが残念だ。

そうこうしている内に騒動を知った人々らが続々と部屋に集まってきた。

一様に表情を占めるのは困惑だ。

俺からしてもそう思う。

周りにそぐわない家具やら家電がそこかしこにありスーツを着た見知らぬ男。挙げ句にその男はベッドの上で組しかれ少女は解放された銀髪さんにしがみついて大泣き中。

「Омчшмёц? нпёдч!」

ティアラさんは厳しい表情で俺に問いかけてきているけど如何せん答えようがない。

とりあえず気を落ち着けて日本語で返答してはみる。

「私は日本人の一瀬優です」

当然ながら伝わらない。拙い英語や大学で必修だった仏語を思い出しながら喋ってみても誰にも伝わっている様子は無し。

この場にいる全員とんがり耳に弓やら帯刀している者がいる時点で何となく悟った。

『こんにちは新世界』

というわけでその後後ろ手に縛られ今に至る。

現状が認識出来ても言語の壁は厚い。もっとも説明しようもないが。周りの方々は恐らくエルフ的な人達だ。

MMOやファンタジー小説で見る姿そのままだし。

一般にエルフは他種族に排他的で云々てのは良くある設定だけどここでも同じなのかと不安にはなるが、それよりも好奇心が押さえきれない。

ファンタジーな世界は元より大好物なのだ。

テーブルトークは勿論小説からゲームまで幅広く網羅している。

何度空想したかも分からない世界に自分がいる。

それだけで何とも言えない気分だ。

ぼんやりと考えを巡らしていると周囲の輪を割ってエルフの壮年男性が現れた。

目の前まで来ると掌中にあったイヤリングを俺の左耳に何か眩きながら着けると同時に俺はあっさりと気絶していた。

異文化こみゆにけーしょん1

額にひやりとした感覚を覚え目を開けると横にティアラさんが難しい顔で椅子に座っていた。

どうやら俺は自分のベッドに寝かされていたようだ。

改めて自分の現状を考えようとすると不思議と熱っぽく頭の奥がじんじんと痛む。

軽く頭を振りながら身体を起こそうとしたら手元に冷えたタオルが落ちた。

きっとティアラさんが付き添っていてくれたんだろう。

「どうもありがとうございます」

伝わらないと解っていても素直に言葉が滑り落ちた。

「どういたしまして。体調は大丈夫？」

どうやら幻聴のようだ。

日本語だ、それも流暢な。

若干表情に陰しさは残るものの心配げな声。

その時耳に違和感を覚え思い出した。

「もしかしてこれのおかげですか？」

左耳に付いているイヤリングのような物に触れながら聞いてみる。

「ええ、それは他言語理解の呪文が込められた物なの。まさか着けた途端卒倒すると思わなかったけど…色々とごめんなさいね」

「いやこちらこそ本当に申し訳ない。どう見ても自分が不審者でしたし、斬られていたとしてもおかしくなかったと思います。いらつしゃればその…先程ベッドにいたお嬢さんにも謝らせてください」

「だそうよ、シェイディー」

入り口に興味深げにこちらを覗きこんでいる二人組がいた。

シェイディーと呼ばれた子はベッドで抱き締めていた娘だろう。

生真面目そうで知的な顔を変わず赤く染めつつも一定の距離を開けて近づいて来る気配はない。

そして隣にいるのはあのチビツ子だ。

こちらはまた殴りかからんばかりの憤怒の表情。思っではいけないだろうがぶるぶると怒りに震える姿はとても愛らしくみえた。

何はともあれ確実に悪いのは俺だ。

頭痛を押さえ付けながらゆっくりと立ち上がり、ティアラさんを間に挟んだ距離を保ち深く頭を垂れる。

「シェイディーさん本当にすまなかった。寝惚けていたとしても何も言い訳は出来ない。都合が良いかもしれないが許してほしい」

「ディー！こんな奴許しちゃダメだよ！あれだけひっぱたいても離さなかったしサワサワもずつと止まらなかったもんっ！それにすつこくやらしー顔してたんだよ？！」

HAHAHA…このチビツ子やってくれる。

好感度ゲージな物があるならばどのような謝罪をもってしても確実に俺のゲージは0を通り越してマイナス方面に振りきれているだろう。

「駄目よフェリ、きちんと謝罪をしてきているのだからそうい

う事は言わないの」

フェリと呼ばれたチビツ子をそうたしなめると俺の方に改めて向き直り赤みの残る顔で笑いかけてくれた。

「丁寧にありがとうございます。その…気にしていませんしそんなにかしこまらないでください」

「体調も大丈夫そうだしディアス様を呼んでくるとしよう。二人との話は後にしてもらおうとして暫く待っていてくれ」

と唐突にティアラさん、謝罪もそこそこに二人を連れて出て行ってしまった。

ひっきりなしの頭痛に顔をしかめながら椅子に座りそういやディ―さんに名前を言いそびれたなあと思っていると、いくらか慌ただしげな足音と共にティアラさんと壮年男性を含めた三人が部屋に訪れた。

俺は立ち上がり改めて深く礼をしつつ挨拶をした。

「私は日本人の一瀬優です。この度は騒動を起こしてしまい申し訳ありませんでした」

他に言い様が無い事もあり言葉少なに態度で示す他はない。

「いや頭をあげてください、失礼が多々あったのは我々もですしこちらこそ謝罪をする必要がある」

渋いバリトン声で壮年のエルフは厳かに言う。

何となく話し合いは長くなるのだろっなあと思つとその前に無性に煙草が吸いたくなつた…

異文化こみゆにけーしょん2

「私はこのシナータの森を治めるシルディアス、改めて君への謝罪と訪れを歓迎しよう」

「私はメアシリア、いきなり手荒い扱いをしてしまつてごめんなさいね。我々の森へようこそ」

「私はエメスティア、あなたの訪れを歓迎します」

三人共に頭を下げる。

「ご丁寧にありがとうございます。でも何故急に客人として迎えてくれるんですか？先程まで倒れていた時もメアシリアさんが付き添つていてくれたようですが…」

ちらりとティアラさん改めメアシリアさんに視線を向けてから聞いてみる。

「ああ、エメスティアに啓示が以前にあつてね。そう遠くない未来に未知なる場所より縁を求め来訪者があると。只君の現れ方がこのようなものだとは予想がつかなかったが」

苦笑しつつ仰るシルディアスさん。
ですよー。

ベッド持参でいきなり娘さんに襲いかかっているのは想定外だろう。しかし啓示なんてものまであるのか。

確かにエメスティアさんが着ている服は他のエルフ達は割に活動的な服装だったのに対して、白地で丈が長いローブに紋様みたいなも

のがポイントで書かれておりいかにもそれっぽい雰囲気だ。

「来訪者の事は皆知ってはいただけだけど私も咄嗟に結び付かなくて」

遠巻きにメアシリアさんに責められている気がしなくてもないがスルーして気になる事を一つ聞いてみる。

「先程より頭痛が続いているのですがこれはイヤリングの影響なのでしょう？単に体調不良かとも思っていますが…」

「魔力酔いではないかと思います。少しお手を失礼しますね」

どこかぼんやりと視線でエメスティアさんが手を重ねてくる。短く何か唱えたかとおもうと白い陶器のような手が淡く光った。

「あなたの身体からは私達が持ちうる魔力が感じません。初めて魔力を体験したため暫くは頭痛が続くとは思いますが長くみても二、三日で治るはずです」

「なるほど…ありがとうございます」

両手を重ねたままに首を僅かに傾げエメスティアさんが言葉を続ける。

「曖昧な言い方になってしまっているのですが…あなたの深層に何かカードのような物で包まれたものがあります。私にはそれが何か解りませんが魔力となにか似た大きな波動を感じます。あなたがいた場所に関係してこちらで発現した物なのかそれとも元々持っていたものなのか判断つきかねます。ただそれは魔力と同質のものならばあ

なた自身や周囲にとつても力にも脅威にもなりえるものです。今は丁度トカシアの月にはいりましたしそれによって変化もあるかもしれません」

「はあ。そのトカシアの月と言うのは为什么呢？」

今の俺は間の抜けた顔をしている事は間違いない。

とりあえず何かしらスキルのようなものが眠っているとでも思っていれば良いのだろうか。

しかしエメスティアさんの手はスベスベ感が素晴らしい。

指の先ですつとふにふにしまっていたが気付かれていないかなだ。

メアシリアさんとシルディアスさんのいる方角からそれぞれ鋭い視線と生暖かい視線を感じるがたぶん気のせいだろう。

「簡単に言えば魔力の力が最も強くなる時期です。他にも影響はあるのですが、長くなりますし文字等覚えるべき事は多くあると思いますので今後順をおって説明していきますね」

「すみません本当に色々と。その言い回しだとやはり私はもう自分の世界に帰れないって事ですかね？」

返事を待つ間に今更ながらまるつきりその事が頭から抜け落ちていた事実に驚いた。

正直に言えば未練が無いって訳じゃない。

それなりに上手く世渡り出来てたつもりだし食事に小説ゲーム諸々や深い友人と呼べるものは作らなかったがそれらが身近にあった世界との突然の別れは寂しい。

だけど縁者もない今、ある意味ではこの事態を歓迎もしている。ここで満足に人間として生活を送れるかも分からない中で、甘い考

えは重々承知しているけど幾度も夢想した世界だ。
帰れる手段があつたとしても自分はどちらを選ぶのかもつ答えは出
ている気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1584y/>

眠れる世界

2011年11月5日06時18分発行